

---

# 魔法戦記リリカルなのはForce ~World Zero~

IKA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはForce→WorldZero

### 【NZコード】

N1985BA

### 【作者名】

IK A

### 【あらすじ】

相良翔が世界を救い、2年が経つた。彼は様々な想いを胸に、一人旅をしていた。そんな彼が巻き込まれる事件。彼を忘れている者、覚えている者達が、彼を様々な想いを胸に・・・探す。そして相良翔が出会った一人の少女と、新たな力 その力が、新たな物語の幕開けだつた。

## 誓いの始まり（前書き）

遂に始めました。

「この作唱も『ララボ』はやります――――――――――――――――――

「ハボしてみたい」と書いた先生は二つともハボケ……！

## 誓いの始まり

相良翔が世界を変えて一年後、彼は旅に出た。

理由は『宇宙に浮いたままだと世界が見えないから、もっと色々な世界を見に行つてくる』と言つ、彼らしい理由だった。

彼の唯一の愛人であるルチアは相良翔の代理として陸宙管理本部総裁を務めることになり、ギンガ・ナカジマはその補佐となる。

ヴァン＝スカイとリオナ＝カミナは現在、階級が上がって11歳にも関わらず、一等空尉へ昇進した。

更に、ヴァンは本人の希望で『執務官』になつた。

現在はフェイトやティアナ達と共に事件に立ち向かつているらしい。

エトワールは陸宙管理本部でルチアと共に戦いの道を進んでいる。

音使奏多は、何故かこの世界が好きになつてしまい、この世界に滞在することになつたらしい。

芳乃零一は事件終結後、地球に帰還して紗雪、なぎさ、サクラの4人で明るく生活している。

ヴィヴィオはコロナ、リオの一人と3人仲良く学園生活と格闘技を楽しんでいる。

高町なのはやフロイト・T・ハラオウンやハ神はやてなびは教導官や執務官、ロストロギア関係の調査などを行なつてゐる。

・・・ま、なのは達は俺の事・・・忘れてるけどな。

相変わらず平和だと言えば平和だ。

平和と言つものは長続きしない。

何故なら人々は、平和に飽きるから。

そして人は新たな刺激を求めて、結果として戦争が生まれる。

だとしたら、どんなに平和な世界を作ろうとも、全て零に戻されてしまつ。

相良「ま、そんなことはどうでもいいけどな」

平和を思わせるような青空を、ルヴェラ鉱山遺跡付近で仰向けになりながら見上げえる俺、相良翔。

ロード「マスター。独り言とは珍しいですね」

相良「うつさい。話せる奴がデバイスしかいないんだ」

マルス「すみません」

メルキュール「人に変形出来れば良かつたですね」

相良「そ、それは無茶だろ」

ロードはその後、修理で再び俺の相棒となつた。

俺の首には白銀、紅、蒼の宝石を三つをぶら下げていた。

俺がこの遺跡に来た理由は様々。

相良「なあ？ やつぱり……あれは、事故だったのか？ 事件だったのか？」

俺は過去のとある事件か事故なのか曖昧な事を調べるためにと云つのも旅のもう一つの理由だった。

ロード「私達からではなんとも言えません。ですが、調査しなければ……死者が報われません」

相良「……そうだな」

それだけは、確かなことだからな。

相良「さて・・・遺跡に入るか・・・って・・・ん?」

近くに寄ると、銃などを武装した兵隊や、研究員らしき人々が集まつていた。

何かの実験か?・・・なんか・・・嫌な予感がするなおい・・・

ロード「マスター。あの遺跡の奥に生命反応があります」

相良「生命反応?」

マルス「ですが・・・」の反応は・・・

メルキュール「実験の後・・・生体実験のよつですが・・・」

相良「生体実験だと?」

まさか・・・この遺跡・・・

痛イよ！－！－！

相良「つ！？」

突如、俺の頭の中に悲痛な叫びが響きわたる。

苦シいヨー！

相良「うう・・・」

ズキズキと痛む頭。

・・・」今まで悲痛な念話は初めてだ。

相良「・・・行くぞ」

ロード「2年ぶりですね」

相良「ああ。じゃ、行きますか」

そう言って俺は武装している監視達にバレないよう素早く中に忍び込んだ。

相良「……なつー？」

奥に入つて最初に驚いた事、それは……

相良「生体……ポット……」

ジエイル・スカリエツティの実験場の様な……そんな感じに左右に整体ポットがあつた。

相良「遺跡に見せかけた研究施設か……」

ロード「それも……相当ヤバイ類のですよ」

全く、平和がどうこう言つてられないな。

相良「この奥に……声の人が……」

俺は固く閉ざされていた扉を解除して、中に入る。

そこに居たのは、全裸で両手を拘束された長い髪の少女だった。

相良「なつ・・・・・」

俺は急いで外に向かおうとした。

ロード「マスター！」

相良「つ！？」

だが、突如俺の瞳が痛み、頭痛が発生する。

相良「まさか・・・・・リアクティングか・・・・・」

マルス「ご主人様！大丈夫ですか！？」

相良「・・・・・ああ。それに、今まで外の奴らに気づかれた。早く・・・  
あの子を・・・」

だめ・・・・・痛いよ・・・・怖い・・・・寂しいよ・・・・

彼女の心の声が聞こえる。

来ちゃダメ！！！

相良「・・・嫌だね！」

そう言って俺は、彼女に近づく。

彼女は泣いていた。

相良「大丈夫・・・泣く必要は、ない！！」

そして俺は激しい頭痛に耐えながら、彼女の頬に右手を伸ばす。

相良「寂しかったんだね。もう、大丈夫だよ」

無理しながら笑を作ると、彼女は笑顔になり、俺に抱きついた。

相良「おっと・・・」

メルキュール「今、ルチアさんにこの状況を通報しますよ?」

相良「や、止めてくれ。ばれたら・・・死ぬ。そんで、取り敢えず服を!」

そう言って俺は傍にあつた衣服をとり、彼女に着せる。

『警告！警告！感染災害の危険発生！！』

相良「感染？」

何だ・・・何が起こってるんだ！？

ロード「マスター！全ての通路が封鎖され、施設内温度が急激に上昇しています！」

マルス「熱焼却処理機能が発動した可能性があります！」

相良「分かった メルキュール。俺に力を！」

メルキュール「はい！」

俺は蒼の宝石、メルキュールを天井に掲げると、そこを中心俺たちに蒼い魔力のフィールドが出来る。

相良「取り敢えず、これで凌いで、準備が出来次第ここから脱出するぞ！」

そつ言つて俺は彼女をお姫様抱っこで抱きかかえ、不安そつな表情の彼女に言つ。

相良「心配するな。言つただろ？ 一人にしないつて。もう・・・寂しい思いはさせない」

そつ言つて俺はしばし粘る。

相良「つ・・・やべ、久しぶりだから体鈍つてんじゃねえかよ」

苦笑いしつつも、辛いのは変わらない。

? ? 「・・・！」

相良「え・・・」

その時　　彼女が俺の右手を引いた。

その瞬間、施設は大爆発する。

誓約  
エンゲージ

俺は  
右手を構える。

そこに、刃がついた一挺の銀色の銃が持たれる。

≪E - C Divider Code - 996≫

その銃は、起動する！！

≈

S t a r t   U p

≈≈

相良『

デイバيد・ゼロ

』

その瞬間、銃から俺が今まで放つたことのない強力な砲撃魔法のような弾丸が放たれ、それは遺跡を貫き、空を駆けた。

ロード「マスター・・・」

マルス「一体・・・何が・・・」

メルキュール「・・・こんな姿・・・」

俺は、瞳を血の様に赤く染め、黒騎士を思わせるような・・・そんな服装になっていた。

天使が

堕天使に変化した瞬間でもあった。

## 誓いの始まり（後書き）

この作品にて、トーマは登場しません。

そして原作通りの物語りですが、途中から完全オリジナルになります。

感染者は相良翔になってしましました。

これによりて、記憶を忘れているなのは達と、新たに設立される『特務六課』。

相良翔を覚えている『陸田管理本部』。

そして後に登場する『フッケバイン一家』。

相良翔と一人の少女が紡ぎ出す新たな物語りが始まります。

感想どうぞ。

誤字脱字はいつもじょごめんですので、注意ください（ 一一一 ）

## 新たな仲間（前書き）

とつま、 小説スタートですね。

いろんな意味で内容が変化していく今作品。

リコイフクグも頼めて、 お楽しみください。

相良 Side

相良「・・・？」

あれ・・・俺・・・一体何が・・・って!?

相良「な、なんじゃこの格好!?」

え! ?俺が真っ黒につ! ?似合わね! -

ロード「なんですかマスターそのイカした格好は?」

相良「そもそも、この銃は一体・・・」

そう言つてると、銃や俺の服装は魔力の粒子となり、右手首に巻き付く。

相良「っつ・・・」これは・・・

右手首に出来たのは、純銀のリング。

マルス「また何やら巻き込まれたみたいですね

相良「あはは・・・まあ性分だよね」

もう仕方ない。

だが・・・この腕輪は・・・

？？『・・・』

相良「あ、大丈夫？ 怪我はない？」

？？『・・・（コクツ）』

無言で頷く所を見ると、大丈夫そうだ。

相良「俺は相良翔。君の名前は？」

ロード「私はロード」

マルス「マルスです」

メルキュール「メルキュールです」

リリイ『リリイです。リリイ・シユトロゼック』

念話・・・彼女は、喋れないのか・・・

相良「リリイ・・・可愛い名前だね。よろしくね」

リリイ『・・・（ゆるゆる）』

相良「うをー？」

リリイは感極まって俺に抱きついてきた。

相良「・・・」

俺は無言でリリイの頭を撫でる。

それは、彼女自身が背負つている心の傷があることを語つてのことだつたのは、言つまでもない。

ロード・マルス・メルキュール「（浮氣だ・・・絶対に浮氣だ・・・）」「」

相良「・・・あ、あそこには人がいるな・・・ロード。ここ周辺の怪我人を教えてくれ。人によつては応急処置が必要かもしけない」  
ロード「ですがマスター。今すぐこの場を離れないと、追つてがきます」  
相良「そんなことはどうでもいい。今は、助けられる命を優先するべきだ」

リリイ 『私は大丈夫』

リリイは俺の想いを理解してくれたのか、了解してくれた。

相良「分かった。リリイは何があつても守るから安心してくれ」

リリイ 《うん》

そう言って俺達は倒れている怪我人達の治療をし、その遺跡をあとにした。

ヴァン Side

シャーリー「お疲れ様ですフェイトさん、ティアナ執務官。それに、ヴァン執務官も。押収物には該当しそうな品はありませんでした」

フェイト「そう。銀十字もディバイダーもここじゃなかつたか」

ティアナ「『エクリップス』の感染者を出すわけにはいきません」

フェイト「うん」

ヴァン「もしも感染者が出た場合・・・なんとしても、捕獲しないと・・・」

シャーリー「執務官を総動員しても、未だ見つからないなんて・・・」

ヴァン「・・・」

僕たちは港火災の現場を訪れるが、目的のものは見つからない。

ただ・・・

フェイト「ヴァン。どうかしたの？」

ヴァン「・・・いえ。戻りましょう。捜査報告をしなければいけま

せんし

ティアナ「そうね」

そうつて僕たちは帰還する。

ヴァン「（嫌な風だ・・・なんか、戦前の静けさにも似てるし・・・  
それに、何か胸騒ぎがする）」

そんな想いを持ちながら、僕達は帰還するのだった。

同時刻、陸<sup>リ</sup>田<sup>タ</sup>管理本部。

ルチア Side

音使「ヴァンからの捜査結果はこれで終わりだ」

ルチア「そつ・・・そつなると、既に感染者が出てる可能性がある  
ね」

私と奏多は執務官兼陸<sup>リ</sup>田<sup>タ</sup>管理本部魔導士のヴァンの報告を受けた。  
私達、陸<sup>リ</sup>田<sup>タ</sup>管理本部も『エクリプス』と『銀十<sup>トモ</sup>』の調査をしてい  
る。

それは、様々な危険の対象だから。

そして “彼女” が動いているから。

ルチア「・・・こんな時、翔<sup>アシ</sup>だったら、もつとちやんとしたのか

な？」

音使「どうだろな。いない人の話をしててもどうこもならなこち」

ルチア「・・・うん。 そうだね」

奏多も、翔の存在を覚えている人の一人。

だから、こんな本音を聞いてくれるのは限られている。

音使「今・・・ビ」で何してるんだろうな」

ルチア「うん。 事件に巻き込まれてなければいいんだけど・・・」

膝枕なんて久しぶりだな・・・

相良「・・・

リリイは安心しきつてか、または緊張から解放されてかで俺に膝枕をされてぐっすり眠っている。

俺達の出逢つて最初の夜は野宿となつた。

焚き火の火を見つめながら、俺は追つてがこないかと起きている。

相良 S.i.d.e

相良「（ へ へ へ ）、 ； ； ； イクシツ」

ロード「風邪ですか？」

相良「いや、そんなはずは・・・」

リリイ『（ ー ー ー ） 。 ～ ～ ～ 』

2年くらい前までは、普通の事で、俺の方がよくされてたな……  
……って、やべ。急に寂しくなってきた。

相良「はあ……」

リリイ『……』

相良「……」

突然、太ももに冷たい水滴がついた。

相良「泣いてる……のか」

リリイは眠っている間、少し泣いていた。

それは、あんな研究所で捕まつて、色々と辛いことがあったから  
だろう。

相良「……」

俺は、そんなリリイの頭を撫でてやることしか……出来なかつた。

相良「……」いつときの俺は、ほんとに無力だよな

ロード「いえ。今できる、最善の事だと……私は思います」

相良「あつがとつ。ロード。」

そつ言つて、俺は夜が明けるまでリリイの頭を撫でてあげのだった。

聞きたいことは、いっぱいある。

昨日の研究所で俺に起こつた事。

あの様な姿になつた理由や、あの研究所で何が行われていたかとか・

でも、それは今聞くのは辛い。

別に、今聞くのではないだろつ。

時間はいっぽいあるんだ。

しつかり、時を待つていよう。

それまでは、俺が必ずリリイを護るんだ。

寂しい思いなんて・・・一度とさせないために。

もう・・・昔の俺みたいな、孤独な人間を・・・なくすため・・・  
に・・・・・・・・・・・

相良「・・・ん?」

リリイ『あ・・・起きた?』

目が覚めると、俺は仰向けで寝ていた。

後頭部に柔らかい感覚・・・それに、リリイの顔が近いな・・・つて・・・え？

相良「ん？ん？」

リリイ『？』

ちょっと待て俺。状況を整理しよう。

1、俺は寝ていた。

2、俺はリリイに膝枕されて寝ていた。

3、今は朝。

・・・よし。OKだ！

相良「・・・いや、どこもOKじゃないな」

そう言つて俺は上半身を起します。

相良「おはよう、リリイ。ごめんな、膝痺れただろ？」

リリイ 『（フルフル） ショウの寝顔、見れたから。おまけ』

相良「あ・・・あはは・・・」

なんと不甲斐ない。

取り敢えず、朝になつたし、町を探すとしますか。

相良「よし。行くか」と

そう言つて俺はリリイをおんぶして歩き出す。

俺たちがいる世界は、ミッドチルダの様な先進都市とは違い、いつなれば田舎のよつな場所。

人が自然と共に暮らす辺境世界もあるなか、俺たちのいるここ、『第23管理世界ルヴェラの文化保護区』もまた、古き良き暮らしを愛する者たちが暮らす地区だ。

相良「やべ、リリイ。腹減つたから、走るぞ」

リリイ 《うんうん》

そう言って俺は両足に魔力を練り、瞬間に爆発させて移動速度を上昇させて走り出す。

相良「街だ〜！！早く飯を〜！！」

「ロード、「確か」」は海産物が美味しいそうですよ。焼き貝に魚介スープ・・・」

相良「言わんでいい。俺の腹をどうしたい?」

移動も通信も、ニードなどと違つて極めて不自由だけじ、  
れて豊かな自然とともに過ごせる土地だから、落ち着く。

相良「そり言えばリリイもお腹空ってる?」

そう言ひと、リリイの腹がぐうううーーと鳴つた。

相良「あはは。ほんとだ！ よし、そんじゃ・・ダヽヽシシユー・・・・・・」

そつと、魔力を使わず、街を走り出す。

リリイ 《～？》

街の人々があたたかな顔で見ていたのはちょっと恥ずかしかったけどね。

俺たちがいるのはルヴュラ北部の港町。

街にいる人に色々と情報を聞く。

おばさん「次元通信？そんなハイカラなもんはここにやないねえ」

相良「ですよね・・・」

やつぱつこの世界じゃいろんな奴らに協力を頼むのは難しいか・・・

おばさん「はい、貢焼き串おまたせ！」

相良「あ、ありがとうございます！」

やつぱつて俺は貢焼きが刺さった串を一本と、他の買った物を持ってリリイのいる場所に向かつ。

相良「取り敢えず・・・リリイの服と靴かつて教会まで歩くか」

教会に行く目的は、陸亩管理本部にいるヴァーンと通信をとつて、一度現状を説明するためだ。

山の向こうに教会があるらしいからな。

リリイは救出してから裸足だったから背負つて歩いていた。

まあ見た目的に危ないので露出少なめの服が欲しい所だ。

相良「リリイ。お待たせ」

リリイ《～～～》

リリイに貝焼き串を渡すと嬉しそうに食べ始める。

相良「んぐ・・・おお、ロードのデータ通り美味しいな

ロード「でしょ?」

なんか胸張ってる・・・まあ今回は感謝か。

相良「それで、休憩宿ならこりへんにあるとして、服屋は無いか?  
?」

マルス「それでしたらあの辺の一角は自由市場の<sup>フリーマーケット</sup>なのです」

相良「ほお・・・そんじやリリイ。食べ終わったら行こう

リリイ《うんうん》

そつと聞いて俺とリリイは食事を終え再びおんぶしてフロマに入つていぐ。

相良「凄い賑やかだな・・・」

商品の種類も様々だ・・・

「はいいらっしゃい 素敵な衣装にアクセサリー」

「お・・・ 服屋だ・・・」

「若いな・・・あの子、学生かな・・・」

「あの、靴と服買いたいんだけど?」

「はいはいーーーあるよーーー」

「元気そうな子だ。」

「服と靴のサイズはどうぞ?」

「あ・・・えへつと・・・」

「リリイのだしな・・・でもリリイは念話でしかしゃべれないし・・・  
（・・・ふむ）んじゃーまずはサイズ測らつか!」

そつとつて彼女はリリイに色々しだした。

しばらくして、結局リリイは髪もわっぱり切つてもらい、服と靴も用意してもらつた。

リリイ『すうい、わっぱりしたー』

本人は嬉しそうだ。

相良「気に入つたようだよ」

「？」「ハイハイ」

何だかんだでやねじりまじりかりやつてくれてるみたいだ。

「？」「んで、このすりゃりヘアーと合図せんと・・・」

やつぱりとコロイの服と靴を装備した姿を見せた。

相良「おお～似合つてるじやん」

パチパチと拍手するとコロイも釣られて拍手する。

「？」「気に入つてもうらえて嬉しいな～！」

相良「でも、お代・・・こんな安くていののか？」ここまでサービスしてもうらつてや

「？」「まーあたしが趣味で作ったものだし」

趣味ね・・・こいつはのクオリティの高さはお見逸れするな。

相良「趣味にしては、ほんと上手だけどな」

やつぱりながら俺は財布を取り出して金を払おうとする。

「？」「わお！きれいなリングー！」

相良「おつー？」

いきなり俺の右手首に付けられているリングに興味を持つてしまった。

？？「これ純銀？彼女も付けてるよね？一人でお揃い？」

相良「あ～まあ、そんな感じかな」

そつと適当に対応するが、彼女の興味はそれだけでは収まらないらしく、俺のリングを取ろうとする。

？？？「ん？」「なに？」「なに？」「なに？」

相良「（ヤツバイ！）」

リリイもあわあわしている。

相良「ま、それはこちらの理由つてことで、はいこれお代

？？？「お

俺は代金を渡し、リリイの右手を握る。

？？「えー何か訳あり？力になれることがあつたら……って……え

『リフレクト・マープ』

？？？「ねねー…ちよ、ねつ…・・ねつ…！」

相良「とつとつといよーー服屋さんありがとー縁があつたらまた

「！」

そう言って俺とソリイはその場からいなくなる。

？？？「ビートしました」

その後、俺達は旅行用休憩宿に泊まるのだった。

部屋は人部屋でベットはひとつ。

過去にルチアと共に泊まつてベットが一つと言つ危険な事があつたので、一度足は踏まないよう聞いて判断したのだった。

俺はロード達をスリープモードにさせると、テーブルの上に置く。

相良「今から行くと教会につくのは夜になる。魔法を使えば話は別だけど、そのための魔法じゃないシリィも疲れる。だから今日は一休みして明け方くらいにいけば丁度いいかな」

リリィ《うん》

俺は取り敢えず上着を脱いで半袖姿となつてベットに座る。

リリィと対面になり、リリィは俺に言つ。

リリィ《ショウはすこいね。色々な事知つてる》

相良「まあここ一年間はずつと旅をしていたから」

リリィ《ずっと?》

相良「ああ。別に帰る場所がないわけじゃない。家族はいるし、仲間もいる」

リリィ《なんで一人なの?》

相良「・・・今回の旅は、“色んな意味”があつてな。色んな世界を見て、色んな発見をしたいなって思つてた」

リリイ《へえー》

相良「旅は良いぞー。野宿なんて今の時代、そつは出来ない。他にも見たこともない発見があつたり、様々の人の優しさに触れることが出来る。一生の中でこんな発見があるなんて得だと思つんだよ」

そう言いながらも俺は苦笑いしながら言つ。

相良「あとはまあ、自分を鍛え直すためのとか・・・のんびり楽しく旅行をつてな」

リリイ《シヨウ、」めんね・・・ありがと!》

相良「え・・・」

いきなりリリイは俺の田の前によつて来てそつ言つた。

リリイ《旅行中だったのに助けてくれて、怖い田にあわせちゃったのに、優しくしてくれて》

上田遣いで涙田の状態でそんなことを言われる。

相良「べ、別にさ。俺が勝手にやつたことだしね・・・それに・・・

「

リリイ《え・・・つ!?》

俺はリリイを抱き寄せ、言った。

相良「寂しいなんて言う人見つけてほっておく事が・・・俺には出来ないんだよ」

そう言って俺はリリイの頭を撫でる。

リリイ 『ありがとう・・・ショウ』

相良「いえいえ」

そして俺たちは眠りにつく。

？？？「失礼します。こんばんは、地域警邏の者ですが・・盗難事

相良「・・・って、」の反応は・・・

眠ったのは良いが、それから数時間後、先ほど出会ったあの女の子の反応があつて起きた。

相良「ロード」

俺はロードだけを持ち、静かに扉に向かう。

リリイ《（ 、 〇 ） ファ～》

リリイは俺せいが起きてしまったが、喋れないのが幸いしてか、それほど響かない。

件についてちょっとお話を」

相良「話はいいですが・・・」

俺は扉を開けて言つ。

相良「なんでおつきの服屋さんがここに？」

？？？「お客様に大事なお知らせ」

彼女は突然現れ、すかすかと部屋に入つていく。

？？？「キミら盗難で街で手配がかかってるみたいだけど心当たりが？」

相良「まあちよいと深い事情が・・・」

？？？「多分だけど、地域警邏がもうすぐ来るよ。逃げるんなら早めがいいかも」

相良「情報ありがと。服屋さんのサービスにしては行き届き過ぎなんだと思うが？」

そう言つと彼女は不敵に言つ。

？？？「ちつちつちつ。まー中々イカした服屋さんってコトで。ついでに今なら裏路地ルートで脱出ガイドが格安なんだけどいかが？」

相良「はあ・・・」

ロード「マスター。どうしますか？切れますか？突きますか？撃ちますか？」

相良「どれもこれも違う。・・・ったく」

ま、こじで無益な争いになつても、街に迷惑かけるだけだしな。

リワイには懲りけど、せつやとこじを出たほうがいいな。

そう決めた俺達はこじを出でいった。

それからすぐ、地域警邏の人が来たのだった。

相良「服屋さん。ありがと、もうこりで大丈夫だけど」

アイシス「やだなー目的地まで送つてくよ あと服屋さんじゃなくて『アイシス』ね?」

相良「はあ・・・なんか、すじいことになってきたな(ーーーー)」

リリイ《?》

ロード「まあ話し相手がデバイスだけじゃなくなつてよかつたじゃないですか」

相良「あ、引きずつてたんだ」

こつして新たな仲間にアイシスと言ひ巻き込む・・・ではなく、巻き込まれに行くことが好きそうな元気つ娘を連れて、賑やかな面々で目的地に向かうのだった。

## 新たな仲間（後書き）

ここまで原作通りですね。

ヴァンも登場し、ルチアや奏多も登場して、物語りは動き出す。

てなわけでアイシスも連れて、次回は遂にあいつが登場。

4つ皿の瓶器と約束と眞実の為に 前編（前書き）

この小説、forceって案外描いていくのが難しい（――）  
まあ頑張りますけどね。

## 4つの武器と約束と眞実の為に 前編

相良 Side

俺達は深夜、ルヴェラ丘陵地帯で野宿をしていた。

焚き火用の枝をポキポキおりながら、アイシスと話しこそする。

アイシス「ま、ユーユー野宿もたまになら楽しいよね

相良「俺達はたまにじゃなくて基本的には毎日だから

アイシス「え・・それって楽しいの?」

相良「まあな。たまに湖の主とか言う奴がいる場所で寝てたり鳥獸の巣で寝たりしたこともあつたけどな」

アイシス「・・・」

リリイ《仲良くなれたの?》

相良「ああ。最初は喧嘩とかしたんだけど、今じゃ親友くらいにはなつてるんじゃない?」

俺の話にアイシスは苦笑いしつつも、自分から質問していく。

アイシス「で、なんで二人は終われたんの?」

この人・・・笑顔で凄い質問してくるな・・・

相良「色々。アイシスには関係ないだろ?」

アイシス「だからその色々を詳しく聞かせてれてもいいじゃん!」

「

いきなり駄々をこね始めた。

アイシス「旅は道連れ世は情け!」

相良「・・・」

なんか、じつ言つ我侭な人と接するの、ほんとに久しぶりだな。

リリイ『あのねアイシス。ショウは私を助けてくれたの。だからシヨウは悪くないの』

アイシス「あ、ああそう・・・なんだ(これ念話?違う・・・精神感応みたいな・・・)」

相良「(アイシスもリリイの言葉が聞こえるつてことは、魔導士か?)・・・」

俺は取り敢えずアイシスの事を質問する。

相良「それで、今度はアイシスに質問なんだけど?」

アイシス「ん?」

相良「お前の荷物のなかからさ、物凄く危険物の臭いがするんだけど・・・俺たちをどうかするつもりか?」

アイシス「つー!?」

アイシスは即座にカバンに手を触れよつとした。

相良「・・・取り敢えず、質問は一つだけ・・・お前は、俺たちの敵か味方か?」

そう聞くと、アイシスは笑顔で答える。

アイシス「味方に決まつてんじやん!だから、何があつたか教えてよー!」

相良「・・・(、) ハア・・・。ロード、教えてあげくれ」

ロード「了解しました。では説明させていただきます」

そつ言つてロードは俺がリリイと出合つまでの経緯を話したのだった。

相良「まあつまりだ。俺達は偶々研究所みたいな所にきて、殺されかけたりして今になるわけだ。施設の一部は壊したし、リリイを連れてつたのは事実。でも、あの状況では仕方なかつた」

そう言って俺はロードを右手に持つて握る。

アイシス「・・・」

アイシスは話を聞き終えると、啞然としていた。

今の俺に、逮捕権も何もないからな。

ただの一般人……まあ今回の関係者で重要な参考人になるわけだが……

相良「その人……ヴァンって言うんだけど、あいつは執務官やつてるからこの手の事件に対しても問題なく対応してくれるだろう。さつきの地域警邏の奴ら、聞く耳も持たずつて所だろうからな」

アイシス「そのヴァンって人はショウの兄弟?」

相良「いや、俺の愛弟子さ。あと、俺の彼女も手伝ってくれるだろう」

ロード「まあ説明したときは怒鳴られるのは目に見えますけどね」

相良「言つな。覚悟の上なんだから（（（・。・。）））」

アイシス「彼女つて……彼女置いて一人旅?」

相良「まあ、俺なりにけじめをつけたくてさ。あと、“ある人と約束”したからな」

アイシス「ふ～ん」

相良「無理言つて、一人旅させてもらつてるから、あまり心配かけてくないんだけどな」

月一でメッセージは送っているのだが、まあ今月からは大変なこと

になるだろ？な・・・

相良「あ、二人とも。はいこれ

そう言って俺は一人に暖かい飲み物を渡す。

リリィ《～？》

アイシス「はふう・・・」

俺も一口飲んでため息をついて、空を見上げる。

相良「・・・ほんと、何も起こらなければいいけどな」

叶わぬ願いを、どうしても願ってしまった。

相良「へえ～

アイシス「でも、気持ちはわかるかな。私も、家族にワガママ言つて進学前の長期旅行」

アイシス「でも、ショウつて私達より歳上だけど、仕事つて何をしているの？」

相良「え・・・あ、まあ・・・そうだな・・・」

俺は頬をポリポリと欠いてビリビリ答へよつた悩む。

アイシス「もしかして無職とかあ～？」

相良「・・・まあ、そんなことだらうな」

適当に答える。

アイシス「そんなこと言つて～魔法系の人でしょ？」

相良「なんで？」

アイシス「デバイス3つも持つてゐるし、何より女の子長い時間担いで走りっぱなし全然疲れてる様子ないし」

相良「そうだな・・・」

確かに、2年ぶりの大忙しだつたのに、全然ばたつかないし・・・

リリイ《「めんねショウ。わたし、ちゃんと歩くから》

相良「平氣だよ。リリイ軽いし」

アイシス「いいなあ、あたしも背負つて 軽いから?」

相良「なぜそうなる・・・」

まあアイシスの言つとおり、ほんとに俺は疲れていない。

かなりの距離を移動している上に、初めてリリィと出会ったあの日に放った巨大な砲撃？

あれを放ったとき、片手撃ちでリリィを抱きかかえていて放つていたのに、全く反動が無かつた・・・

あの時の銃・・・いや、ナイフ？

名前は確か・・・

相良「E.C.・・・デイバイダー・・・」

『Start Up』

相良「おうつー!?」

突如右手のリングが光だし、右手にあの時の銃と、左手には一冊の本があった。

相良「つて……ええ？」

リリィ《……》

アイシス「（（（（；。）））」

リリィは恼ましい表情で、アイシスは怖がる様子で俺を見る。

ロード「何いきなり武器だしてんですかマスター」

アイシス「ななな、なにナニシ一？暴力反対！武裝反対！…」

相良「違つー待つてくれ！…なんか、勝手に出来たんだよー！」

アイシス「なんじやそりや…………！」

俺とアイシスが慌てるなか、リリィは冷静に対処法を言つ。

リリィ《ショウ、『ブレード・オフ』で戻せると想つ》

相良「あ、ほんと？なら……『ブレード・オフ』」

そつと俺の右手首のリングに戻つていった。

相良「・・・ふう。びっくりしたー」

アイシス・ロード「それはこっちのセリフっーーー！」

二人のツツコミニに若干驚くが、一度深呼吸して座る。

アイシス「今の何？ショウのデバイス？」

相良「いや、俺のデバイスはロード、マルス、メルキュールだけだ」

ロード「ですね」

アイシス「リリイも詳しくは知らないんだよね？」

リリイ《うん。だし方と戻し方くらいしか・・・》「あんね、ショウ》

相良「良じよ。記憶がないのは仕方ない」

俺も、記憶がない人の気持ちは分かるからな。

ロード「ですが、マスターとリリイ殿の腕輪やあの施設の秘密と関わりは、あるとみて間違いないですね」

相良「ああ。と考へると、俺のもつこれは・・・相当危険な武器だ」

取り扱い説明書が欲しいところだ。

相良「まあこれはゆっくり考えるとして、今日はもう寝よう。一人ともやすんで」

明け方になつてからいくとするか。

アイシス「はあい」

リリイ《うん》

その後、一人は隣り合わせで眠りにつき、俺は監視の為に起きてロードと話す。

マルスとメルキュールの2機にはここから半径1キロ圏内の捜査に集中してもらつてる。

ロード「それにしても、楽しいお友達ができましたね」

相良「友達と言つよりは、要救助者と勝手についてきたお人好し?」

みたいな人だる」

ロード「それでもですよ。最初、私はマスターが旅に出ると聞いたとき、また独りで生きる事を決断してしまったのではないかと心配しましたから」

相良「・・・そう、だな」

もしかしたら・・・そうだったかも知れない。

けれど、リリイとの出会いには、今に繋がる。

アイシスと出会えたのだって、リリイと出逢つて服と靴が必要だつたからで、リリイがいなかつたら出会いとはなかつたのだから。

ロード「この出会いは、マスターが旅を終わりにさせた良こきつけになると想いますよ」

相良「途中で全てを諦めるのは嫌だな」

ロード「金では、どこでも見つかります」

相良「・・・きっかけが欲しいんだよ。託された約束と、俺の中でのけじめ・・・」

俺はトーマが旅を続けている理由を聞いた。

「ステイード」「アーリア」

「ロード」「アーリア」

トーマ「俺はトーマ・アーヴィール。」

相良「初めまして。俺は相良翔。デバイスはロード」

俺は暇そうに旅をしてくると、俺と同じく一人旅をしてくる少年と出会つ。

これは一年前、旅を初めて1年経った時の話。

トーマ「6年前、ヴァイゼン遺跡鉱山の事故、知っていますか？」

相良「ああ。街が砕けて・・・230人くらいの人々は・・・」

トーマ「俺はあの事故に巻き込まれて・・・見たんだ。一人の腕に藍色の羽がついた奴らを」

相良「つ・・・まさか、お前はそいつらに復讐でもするつもりか！」

？」

トーマ「違う。俺はただ、“真実”が知りたいだけなんだ。事故なのか、“事件”なのか」

相良「・・・」

そして今。

相良「あの場にいたとされる・・・街を壊したかもしない、誰か。調べた結果、7年前に公式記録で事故つて断定されてしまったが・・・」

ロード「何か？」

相良「・・・犯人なんて、いないかもしない。だけど“そうじゃないかもしない”。俺も、トーマも、本当は知りたいのか知りたくないのか、もう過去の事を覚えている必要はないのか。トーマが探しているのは、『踏ん切り』で、俺が探しているのは“真実”だ。俺はあいつと約束した、必ず真相を明らかにするつて・・・」

ロード「マスターは、他人の背負つている過去まで、背負つつもりですか？」

相良「違う。一人で背負つて欲しくないんだ。忘れたくない記憶があつて・・・忘れられない悲しみがあつて、つらい日々が続く。そんなんの・・・嫌に決まってる」

ロード「マスター・・・」

心配そうな声が聞こえる。

相良「それに、俺はトーマの過去が終に向かって欲しいんだ。あいつは自由に羽ばたいでいいんだ。俺は・・・あいつの翼を羽ばたかせたいんだ」

ロード「・・・あなたらしいですね」

相良「嫌か?」

ロード「いえ。私の道は、マスターと同じ道ですから」

相良「助かる」

そう言つて俺はリリイ達の傍に向かう。

ロード「マスター。一つ聞いていいですか?」

相良「なんだ?」

ロード「マスターはリリイ殿を、どう想いでですか?」

相良「・・・ヒヽ、ヒヽ、ヒヽ?」

ロードが不思議な事を聞いてきた。

ロード「マスターはリリイ殿を救いました。その結果としてリリイ殿はマスターに懐いておりますが、ヴァン殿と合流後、いかがなされるのですか?」

相良「・・・」

そつと言えば、そだよな。

俺は、リリイを助けて・・・リリイの責任者みたいなもんだ。

ヴァン達に任せるのはどうかと・・・

相良「まあ、リリイが良ければ、俺の“家族”になつてみないかつて誘つてみるかな」

ロード「家族・・・ですか」

相良「ああ。家族に多いも少ないもないからな。ただ存在するしかないだけだ」

ロード「そつ・・・ですね」

そう言いながら、ロードはスリープモードとなる。

相良「・・・あ、ごめん。眠れなかつたか？」

リリイ《ううん。寝てたから聞いてなかつた》

アイシス「あたしも」

相良「そうか。ありがとう」

そう言うと、二人は笑顔で眠りについた。

俺は静かに、アイシスとリリィの頬を撫でて、空を見上げる。

相良「・・・？」

あれ・・・右手・・・すりむいたかな・・・

腕輪の部分が少し赤くなっていたのは・・・少し気にするくらいだ  
った。

だが、この腕輪が、これから起る騒動のきっかけになるとは、こ

の時に『気づく』とは出来なかつた。

次回はいよいよ戦いに入ります。

・・・武器4つって凄いね。

なのは「ねえ、私は登場しないの？」

ヴィヴィオ「私も登場したい！」

アインハルト「わ、私も！」

IKA「ちょっと待つてね。まだ待つてくれ」

全員「「「嫌だ！……」「」」

相良「お願いだから待つてくれ

全員「「「分かった」「」「」

IKA「相良すげー」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1985ba/>

---

魔法戦記リリカルなのはForce ~World Zero~

2012年1月5日20時50分発行